

平成 25 年度 海外臨床薬学研修報告書

「アメリカと日本の医療と薬剤師のあり方」

研修期間：平成 26 年 2 月 22 日～3 月 9 日

研修先：南カリフォルニア大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

090973152

長谷川 瑛美

平成 26 年 2 月 22 日から 3 月 9 日までの 2 週間、南カリフォルニア大学（USC）で海外臨床薬学研修に参加させていただきました。

私は病院実習と薬局実習を終え、日本の薬剤師のあり方や役割や業務を学びました。そこで以前からアメリカでは薬剤師の地位が高いということを伺っていたため、日本と海外の薬剤師のあり方、薬学部教育の違いを確かめたいと思い、応募しました。

アメリカでは、薬学部入学に必要な一般的な基礎科目の単位を取得したのち、卒業後薬学部に入学することができます。日本とアメリカの薬学部教育の期間はほぼ同じ期間ではありますが、日本では授業と研究が多く割合を占め、アメリカでは臨床的な実習が多く割合を占め、さらに単位取得のため約 900 時間のインターンシップが必要とされています。ここが日本とアメリカの薬学部教育の大きな相違点であると感じました。薬学部 2 年生の授業にも参加させていただきました。授業の内容自体は日本の薬学部の内容とほとんど変わりはありませんでした。しかし、学生はほとんど全員自分専用のパソコンを持ち歩き、授業のスライドの PDF をダウンロードして授業を聞きながら内容をまとめるというスタイルが主流でした。また、授業も日本の様に受け身ではなく、わからないことや疑問点があればその時すぐに先生に質問するというように積極的でした。

Eagle Rock にある Queens Care という地方のクリニックを見学させていただきました。アメリカでは民間の医療保険に加入するのが一般的ですが、医療保険に未加入か、保険に加入していても医療費が支払えない状態の人も多く、高額医療費のかかる病院での診察や治療を受けることが出来ないことがあります。病院での診察や治療は少なくとも 3 か月に 1 回と伺いました。地方のクリニックはその間を埋める役割があります。高額な病院での治療費の支払いが困難な患者さんに対して週に約 1 回カウンセリングをして投与計画の変更やリフィルを無償で行っています。クリニックの大きさや外見は日本のクリニックと大差はありませんでしたが、クリニックに薬剤師が常駐しているという点が大きな相違点だと感じました。患者さんが来院するとまず薬剤師はカウンセリングを行います。この際、薬剤師は患者さんの臨床検査値や健康状態を見て薬剤の変更、増量、減量、中止などを医師の診断無しで判断できます。カウンセリングの内容や治療計画は各疾患でプロトコルがあり、それは各クリニックで異なります。また、スペイン語を話す患者さんが多いので、カウンセリングする際にも薬剤師はスペイン語を話さなければならない時が多くなります。

カウンセリングの内容は、糖尿病の患者さんを例にとると、普段食事を摂るのは何時か、何をどのくらいの量食べているのか、間食はしているか、運動はしているか、血糖値はしっかり測っているかといった内容で、日本の面談と比べると一歩踏み込んだ内容であると感じました。これも、アメリカの薬剤師が投与設計できるということにより与えられる業務であるのだと思いました。また、用法用量を確認する際、日本では「しっかりこの時間に何錠飲んでいますか？」という Close な質問が多いですが、このクリニックでは「この薬はいつに何錠飲みますか？」というように Open の質問をするように心掛けているように感じました。このことから、アメリカでは SOAP の中に患者さんの薬識や病識を問う「Understanding Test」が含まれている意義がうかがえました。

アメリカでは医師の負担を減らすため薬剤師は、投与設計、リフィル、予防接種、カウンセリングを行

うことができます。これらの業務を医師から任されているということは、医師から薬剤師がとても信頼されていることが想像できます。

病院での薬剤師の業務は主に、輸液の混注、病棟の患者さんの薬剤の管理、テクニシヤンの調剤する輸液や薬剤の監査です。しかし薬剤師はほとんど調剤を行わず、テクニシヤンが中心となって調剤を行っていました。アメリカの病院薬剤師の日本と同じ点は、病院薬剤師は中毒域が存在する薬剤などの TDM、病棟患者の服用する薬剤の副作用や相互作用の確認をすることです。日本と異なる点は、医師から「この患者についてどのように治療していけばよいのか？」というように治療計画についての相談をされる点です。薬剤師は他の医療スタッフからも多大な信頼があり、尊敬される存在であることを実感しました。

薬局薬剤師の業務について見学するため、El monte pharmacy という薬局に見学させていただきました。そこではアメリカでは大変珍しい一包化が導入され、220 種類もの薬が導入されていました。調剤の内 60% を機械で行い効率化を図っています。薬局での処方せんの受け取り方は 4 つのルートがあります。一つ目は患者さんが病院から受け取った処方せんを直接薬局に持参するルートです。二つ目は患者さんが薬局に FAX で処方せんを送るルートです。三つ目は薬剤師が薬歴をパソコンで見るルートです。四つ目は病院の医師が直接薬局の薬剤師に電話するルートです。このように患者さんのニーズに合った受け取り方が選択できるようにされていました。また、この薬局では薬剤師によるインフルエンザの予防接種を受けることが出来ます。日本では、薬剤師は基本的に患者さんに触ってはいけないとされていますが、アメリカではそういった概念はないことを学びました。また、多種の言語の患者さんでも対応できるように、それぞれの言語を話すことが出来るスタッフが常駐していました。この薬局では、他の薬局にはまだ取り入れられていないことを導入して最先端の医療を行っているという印象を受けました。

El monte pharmacy 以外にサンタモニカにあるハーブ薬局にも見学させていただきました。このハーブ薬局は約 70 年間もハーブ専門に調剤を行っています。ハーブを調剤するのにライセンスは不要ですが、列記とした処方せんが存在します。以前はハーブの葉を抽出して服用していたそうですが、最近はその抽出液をそのままタブレットにしたものが主流です。しかし、本来ならハーブの味や香りを感じたほうが良いのですが、最近では利便性の点でタブレットが一般的だということです。タブレット以外にも口の中に滴下する液体のタイプのハーブや、舌下錠もありました。これらは街のスーパーマーケットにも陳列されており、ハーブがアメリカではとてもメジャーなのだと感じました。一方、日本ではアロマセラピーは存在するものの薬局でハーブが処方されるということがあまり一般的ではなく、とても興味深く感じました。

今回の臨床薬学研修を通して気づかされることがたくさんありました。アメリカと日本の薬学部教育や薬剤師制度や医療のメリット、デメリットはそれぞれあります。それを共有しあい上手く活かしていけば、お互いにより良い医療を行うことが出来るのではないかと思います。また、今回研修に参加してみて日本が誇ることの出来る医療は、細やかな心遣いだと改めて感じました。日本の薬局やクリニックでは、待ち時間が退屈な時間にならないように本やテレビやフリードリンクを設置したり、子どもが楽しく過ごせるようにキッズスペースを確保するなど、患者さんの立場に立って考えられていると感じました。小さなことに対する気遣いをできるのは日本が誇れる医療だと思いました。

この臨床研修の 2 週間は私にとってとても有意義に過ごすことができ、日本とは異なる視点から医療を見直す良い機会になりました。計画して下さった関係者の方々、引率して下さった先生、研修先でお世話になった先生方、親切に付き添って下さった学生の方、一緒に学ぶことが出来た学生の方々に深く感謝致します。

2 週間、本当にありがとうございました。